成蹊大学日本文学科　日本探求特別講義B

2012年後期　江戸の本づくり

第１３回　江戸時代の出版統計　その取り方

橋口（はしぐち）　侯之介（こうのすけ）

どのくらいの本ができたか

国文学研究資料館　http://www.nijl.ac.jp/　が運営するインターネット「日本古典籍総合目録」は、和本類の最も信頼のおけるデータベースである。

約 45 万点検索できる。元になったのは、昭和 39 年から岩波書店で刊行された『国書総目録』全 8 巻＋索引 1 巻である。書名・著者名などで検索をすると、下図のように書誌データと所蔵図書館が示される。

National Institute of Japanese Literature
国文学研究資料館
English　ヘルプ

日本古典籍総合目録
Union Catalogue of Early Japanese Books

【著作詳細】　前画面へ戻る　検索画面

該当件数：1件（1-1件目）

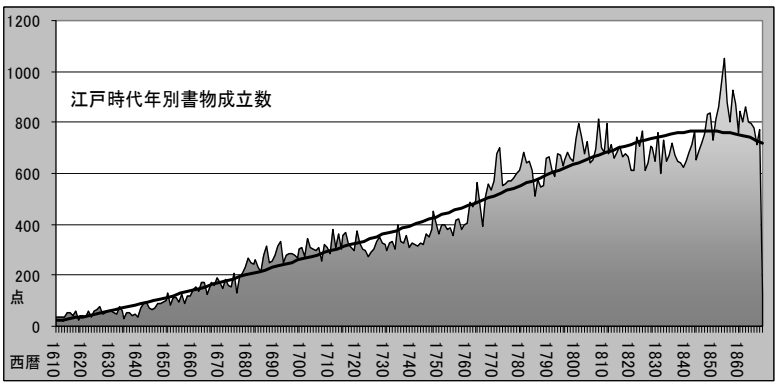
全選択　全解除　書誌詳細

項目	内容
著作ID	32462
統一書名	詩本草（しほんぞう）, K, 1
巻冊	一冊
分類	飲食 漢詩文
著者	柏木／如亭
成立年	文政元自序
国書所在	【写】乾々【版】＜文政五版＞村野＜万延元版＞国会，国会翻軒，国会白井，静嘉，東博，香川大神原，京大，京大富士川，慶大幸田，慶大斯道，早大，東大，東北大狩野，広島大，大阪府，日比谷加賀，日比谷東京，岩瀬，金沢市稼堂，杏雨，乾々，植■，茶図成蒼，茶図武藤，無窮神習，無窮平沼，村野，凌霄，［補遺］東京家政学院大，岡山県，日比谷諸家，松宇＜刊年不明＞刈谷，香雨，茶図成蒼
著作種別	和古書

書名や著者名、巻数冊数などの基本情報が載っていて、そこにその本の〈成立年〉という項目がある。いつ書かれたものかという意味で、新刊本ならその初版発行年、それがわからないときは序文などにある年代で採られている。

拙著『江戸の本屋と本づくり』ではこのデータを用いて統計的処理をしてみた。中世以前の本が、全 45 万点のうち 5 万点あったので、江戸時代（慶長～慶応まで）に成立した本は 40 万点。成立年は、必ずしも本として刊行された年とは違うし、正確な成立年代がわからない本が多いので抽出できたのは 10 万点ほどだが、それでも時代の流れを十分に見て取ることができる。

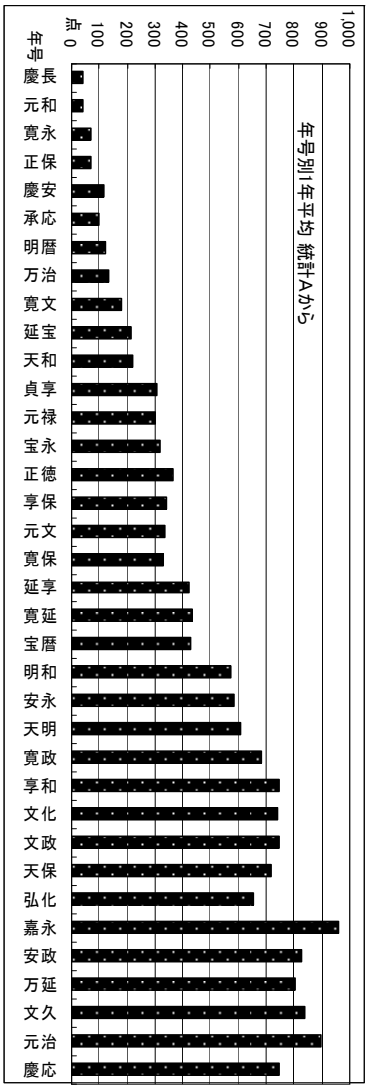
江戸時代年別書物成立数



右のグラフはその成立数を年別に並べたものである。

年ごとに多少のばらつきがあるため、グラフにできた凹凸を吸収して、見やすくした「近似曲線」というものを加えた。それが太線であるそれで見ると、江戸時代の間に、確実に右肩上がりで増大したことがわかる。

西暦1600年代の前半は年間百点未満しかなかったものが、1850年代になると800を越し、1000点を超えた年も出てくる。

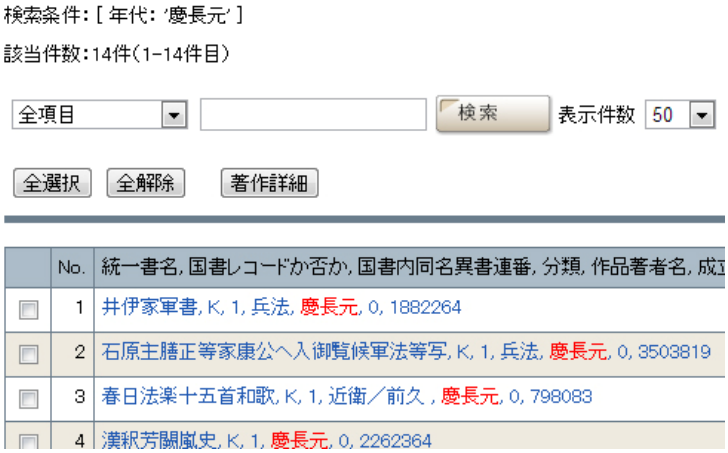


これを慶長以来の「年号」別に取り出し、それを1年ごとの平均値にしたのが右図である。右肩上がりの様子は同じだが、18世紀中頃の明和、10世紀末の享和、幕末に近い嘉永に前後より高い値を出す時期があったことも見える。あるいは、18世紀前半の正徳頃まで順調に伸びてきたのに、享保～寛保にいったん減り、明和でぐんと伸びたところなど、微妙な変化が見てとれる。19世紀中頃では天保・弘化で減っている。これは飢饉などの不況が影響していると思われる。嘉永の飛び出た多さも注目される、など細かな動きも観察できる。

統計の方法

「日本古典籍総合目録」の検索で、「成立年」に合わせて年号＋年数で検索する。年数は和数字で1年は「元」となっているので〈慶長元〉と指定する。2年目からは〈慶長二〉〈慶長三〉などで一年ごとに検索する。検索するとそれに該当する本の一覧と点数がでる(**下図は〈慶長元〉で検索した一部**)。この「該当件数：14件」をExelの表の西暦1596年のところに記入する。次の年からも順次こうして記入していく。年号の切り替わる年は例えば慶長元年は前の文禄5年と同じ年である。〈文禄五〉でも検索しておいて2のデータを合わせると正しい1596年のデータがとれる(ちなみに〈文禄五〉は28件あったので合計42点である)。このあと慶応４年（＝明治元年）までExcelの表をつくる。

古典籍ＤＢが完全に正しいとは限らないが、同じ条件で272年間のデータがとれることになる。その合計が105,032だった。そのままExcelのグラフにしたのが、前頁下の折れ線なのである、年ごとにバラつきがあるのでギザギザである。全体の傾向を見やすくするためにExcelに用意されていた「近似曲線」を引くと、緩やかなカーブになった。近似曲線とは、5年ないし10年ごとに平均をとり、それを毎年の線に直していく方法である(グラフでは10年とした)。



なお、同じ本が何度も再板・増刷されても統計上は1点と数える。

この方法は、公開されているデータベースによるので、第三者の確認・追試が可能である(まだ誰もしてくれていないが)。

マクロとミクロ

最初のグラフは、成立年代別だけを見たもので、毎年、何点の本ができたかということとそ

の変遷量と経年変化がわかるだけである。それを**マクロの視点**とする。しかし、それだけでは実質が見えてこない。それぞれの年にできた本の実際を調べて、それがどのような存在だったかを細かく知りたい。だが、270 年間 10 万点すべてで把握するには、時間と専門知識のある多くの人の参加なしにはできない。そこで取られる方法は、いくつかの年を限定してサンプル調査することである。そのサンプルが**ミクロの視点**となる。特定の年を「輪切り」にしたようなものだ。この双方ができないと本当の統計にならない。

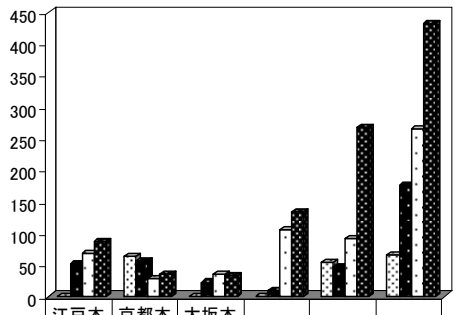
写本と版本／町版と私家版

ミクロの視点でまず見ておきたいのは､写本がそのうちどれくらいあるかということである。写本も版本と同じように読まれ、また流通したことは何度も述べた。データベースに「刊写の別」という項目があり、版本なのか写本なのかが区別できた。その総数を検索したら、刊本 142072、写本 80313(平成 18 年 9 月現在)と出た。写本の割合は 36.1%である。およそ三分の一は写本だったことがわかる。

本屋が出す本を町版といい、出版文化の中心ではあったが、それ以外の個人や寺院、藩などで出す私家版も多かった。統計で調べたら版本のうち町版：私家版の割合は６：４位の比率だった。全書物の中で考えると、上記のように写本が三分の一、残りの版本のうち４４％が町版、２２％が私家版ということになる。

これをミクロの視点でもっと具体的な数値にしたい。

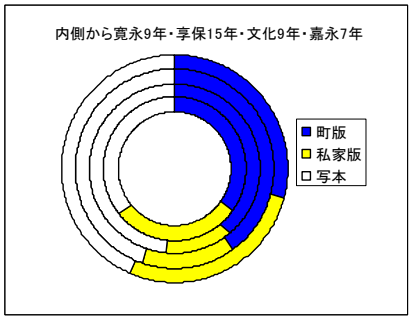
わたしの調査では、江戸時代の前期・中期・後期、・幕末の 4 つをとりあげた。商業出版が離陸した寛永 9 年（1632)、それが軌道に乗った享保 15 年（1730)、江戸後期文化の最盛期ともいえる文化 9 年(1812)、そして書籍点数が最大値となった嘉永 7 年＝安政元年（1854）である。



	江戸本屋	京都本屋	大坂本屋	草紙系	私家版	写本数
寛永9年	0	63	0	0	53	65
享保15年	52	57	22	10	47	175
文化9年	68	28	35	105	91	264
嘉永7年(安政元年)	86	36	33	134	267	432

それぞれの年の該当する本の書誌情報をインターネットや参考文献で１点１点あたっていく。データとして怪しいものあったが、それがどの分野の本か､版本か写本か、版本なら町版か私家版か、どの地域の本屋か、「物之本」と「草紙」の区別などを調べた。その結果が左の表とグラフである。

町版･私家版･写本の区別だけを円グラフにもしてみた。



出版形態にしても、分類にしても、ほとんど区別のつかない本か　どちらともつかない境界上の本もある。細部の数値は変わってくるが、まずは把握が大事だ。これまでの研究は、こうした統計処理が全く行われてこなかった。若い諸君の継続を願う。